

## 图书介绍

### 《远离战争 追溯那段与我息息相关的历史》

城戸久枝著 信息中心出版局  
1600 日元+税 2007 年 9 月刊出



最近、一本由中国遗华孤儿第二代撰写的书出版了。此书是作者对身为遗华孤儿的父亲以及相关中国人进行走访、交谈之后整理记录出来的其父亲一生的著作。迄今为止，将遗华孤儿、遗华妇女故事公诸于世的，主要是报章、电视等新闻媒体，而这次给大家介绍的《远离战争 追溯那段与我息息相关的历史》则不同于前，它的诞生缘自一位父亲和一个女儿两代人之间的对话，并且是“由遗华孤儿第二代撰写出来的孤儿家庭故事”。

将《远离战争 追溯那段与我息息相关的历史》整理成书的城戸久枝女士，是1976年在日本出生的遗华孤儿第二代。虽然她曾经从母亲嘴里听说过父亲在中国经历过的苦难，但是在她的感觉中，对自身往事很少谈及的父亲，“跟其他同学的爸爸根本没有什么两样。”可是同学们提出的“你爸爸是中国人啊？”这一疑问，却使她幼小的心灵受到了伤害，慢慢地她开始无法接受这种父女关系。小学三年级那年暑假，全家去中国探亲，她见到了“中国的奶奶”。尽管分别时她也曾难过地流下了眼泪，然而促使她真正关注中国，还是进了大学以后。

升入大学的她，有了跟汉语以及中国留

## 図書紹介

### 『あの戦争から遠く離れて』

私につながる歴史をたどる旅

城戸久枝著 情報センター出版局  
1600 円+税 2007 年 9 月刊

中国帰国者2世の書いた本が出版された。中国残留孤児である父親の人生を、本人や中国の関係者から聞き取り、まとめた本だ。これまで、残留孤児・残留婦人の物語を公にできたのは、新聞やテレビなどのマス・メディアが中心だった。今回紹介する本がこれまでと異なるのは、親と子の対話を通して生まれた「帰国者2世の手による帰国者家族の物語」という点だ。

『あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅』をまとめた城戸久枝さんは、1976年に日本で生まれた中国残留孤児2世だ。母親から父親が中国で苦勞したことは聞いていたが、自身のことをあまり話さない父親は、著者にとって「同級生たちの父親と何も変わらない存在だった」という。ところが「お父さんは中国人なの？」という同級生の問いに幼い著者は傷つき、父親と中国との関係を受け入れることができなかった。小学校3年の夏休みには家族で中国を訪ね、「中国のおばあちゃん」とも会い、別れ際に涙を流すという経験をしているが、著者の関心が中国に向くのは大学に入ってからだった。

大学に入学後、中国語や中国人留学生と触れ合うようになり、著者は徐々に中国への興味を抱いていく。大学3年の夏、父の知り合いで、中国に住んでいる日本人家庭にホームステイする機会に恵まれる。旅行者として「外国」を楽しんでいた著者は、ある日街中のマンホールま

学生接触の機会、这使她渐渐地开始对中国感起了兴趣。大三那年的夏天，她获得了一次机会前往父亲认识的、在中国生活的一个日本家庭住的一段时间。于是她作为一名“旅行者”，享受着游走“外国”的快乐。可是有一天当她得知街道的那些下水井盖都是伪满时代的遗留物时，她强烈而真实地感受到日本曾经统治过这片土地，这片土地上曾经生活过无数的日本人。与此同时，她读了《鸿》（张戎著，讲谈社）这本正被传扬以三代女性苦难生活为背景，描述中国近代史和文化大革命之狂野的纪实性小说，她开始为自己对中国一无所知，就来到中国而感到羞愧。父亲就是在这个国家度过了那段被称为“文化大革命”的黑暗时期，这使她十分震撼。于是她下决心去中国留学，因为中国有着太多她应该了解的事情。在决定好前往吉林大学学习现代日中关系史，并且临近出发的前几天，父亲给她看了自己收藏的整整一纸箱资料——报章消息以及回日本前给爷爷写的近一百封信。这些资料使她有生以来第一次强烈地意识到自己是遗华孤儿的后代，同时也生出了想要了解父亲前半生的渴望。

就这样开始了吉林大学两年的留学生活，同时也成为她追溯父亲前半生的旅程。留学结束后，旅程还在继续。整整十年时间，她不断地追寻着父亲走过的足迹，并完成了长达450页的长篇著作。

《远离战争 追溯那段与我息息相关的历史》第一部讲述的是从1945年至1997年这一期间父亲“城户干”的故事。故事通过对父亲本人及中国亲戚、朋友等进行打听走访，以及通过查阅父亲留下的日记等资料，为我们展现了一段贫穷而温馨的养父养母与养子间的亲密关系；父亲少年、青年时期的生活；有关父亲出生线索的找寻和判明过程；作为一名日本人经历文化大革命的事实，以及回到日本前的生活等，描述十分详细。

第二部撰写的是作者自身从1997年到

でもが満州国時代のものであることを知り、日本がこの土地を統治し、日本人がこの土地で暮らしていたのだという強烈な実感が湧きあがる。また、この頃に紹介されたノンフィクション、三代にわたる女性の苦難を背景に中国の近代史と文化大革命の狂気を描いた『ワイルド・スワン』（ユン・チアン著、講談社）を読み、何も知らずに中国に来ていたことを恥ずかしく感じる。文化大革命という暗黒の時代に自分の父親がこの国で生きていた事実には圧倒され、中国には知っておくべきことがたくさんあると、留学を決意する。吉林大学で現代日中関係史を学ぶことが決まり、中国への出発が間近に迫ったある日、父親はダンボール箱にしまいこんでいた資料—新聞記事や帰国前に祖父宛に出した100通にのぼる手紙などを著者に見せてくれる。それらに目を通すなかで、著者は自分が中国残留孤児2世であることを初めて強く意識し、父の半生を知りたいと思うようになる。

こうして吉林大学での2年間の留学生活は、父親の半生をたどる旅ともなった。留学終了後もこの旅は続き、10年にわたり父親の足跡を追いつけ、450ページにおよぶ著書が完成した。

第1部は、1945年から1997年に至るまでの、父親「城戸幹」の物語が描かれている。父親本人や中国の親族や友人知人への聞き取り、父親が残した日記などから、貧しくとも温かい養父母との親子関係、少年期・青年期の生活、身元に関わる手がかり探しと身元判明、日本人として過ごした文化大革命時代の現実と帰国までの生活などが、大変詳しく語られている。

第2部では、1997年から2006年までの著者の物語が綴られている。留学生活で経験した中国の親族との濃密な「家族愛」・反日感情との遭遇、帰国後の中国残留孤児たちとの出会い

2006年这一期间的故事。故事展现了作者在留学生活中感受到的、亲人之间那种浓浓的“亲情”，以及作者所遭遇的反日情绪；回国之后与遗华孤儿的邂逅；参与要求国家赔偿的索赔诉讼；祖父不得不把父亲留在中国的心酸背景；后来与中国亲人以及认识父亲的人之间的交流等等。

已经有三十多家报章、杂志就《远离战争》一书发表、刊登了书评和介绍。现在此书已进入图书评论及多家书店最受欢迎图书排名榜之前十名，并且已决定增印。那么，一本围绕遗华孤儿的“家庭故事”，为什么会打动日本人的心呢？相信它吸引人的地方，决不会仅仅因为讲述了一个父亲奇迹般的故事。

作者借进住他人家庭这一契机，因而踏入了一个她从来不曾意识到的有缘世界，并且认真的面对孕育了自己的那段家庭历史，以及因此而使自己得以延绵生存的今天，最终面对了父亲曾经送走半生的中国。在这个过程中，两个国家始终盘桓交错于复杂的历史当中，同时，对于生活在中国和日本这两个国度的人们，彼此间应该建立一种怎样的相互关系，作者也试图通过自己的视点来进行重新诠释和定位。

相信读过这本书的人，都会禁不住扪心自问：对于自己家人生活过的时代及其送走的半生，我到底了解了多少？与他们肩并肩走过了多少？遗华孤儿第二代描述的“家庭故事”，撼动着一直以来缄口不谈战争和历史，意欲将其忘却的日本人的心灵。（N）

と国家賠償訴訟への関わり、父を中国に残すことになってしまった祖父の足跡、その後の中国の親族や父親を知る人々との交流が描き出されている。

『あの戦争から遠く離れて』は、これまでに30以上の新聞・雑誌等の書評などに取り上げられ紹介されている。ブックレビューやいくつかの書店の売上ランキングでも上位10位内に入り、増刷も決定した。この帰国者の「家族の物語」が、なぜ日本人の心を打つのか。それは、父親の奇跡のような物語が関心を惹き寄せているだけではないだろう。

著者は、ホームステイをきっかけに意識したことのない縁の世界に足を踏み入れ、自分を生み出した家族の歴史と、そこにつながって現代に生きる自分、そして父親が過ごした国「中国」に向き合う。その過程で、複雑な歴史が絡む二つの国、中国と日本に生きている人間同士の間に関わり方についても、自らの視点から捉えなおそうとしている。

この本を読んだ人は、家族の生きた時代とその半生に、自分がどれほど向き合い、寄り添ってこられたのか、自問せずにはいられないはずだ。中国残留孤児2世による「家族の物語」が、戦争と歴史を語らず忘れようとしてきた日本人の心を揺さぶっている。（N）

